「源氏物語」柏木の亡霊考・「陽成院の御笛」の意味するもの

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>山畑 幸子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>清心語文</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2008年7月</td>
</tr>
</tbody>
</table>
一 はじめに

源氏物語

陽成院の御笛

柏木の亡霊考

の意味するもの

山畑 幸子

陽成院の御笛

この笛は、『横笛』を、一条御息所（落葉宮の
母）から柏木の遺品として夕霧に贈られたものである。そして、その
夜、夕霧の夢に思いつき、柏木の亡霊が現れる。笛を伝えたい相手は夕霧ではないというのである。

柏木遺愛の横笛について、この笛はどこに見えるべきか、ある物語を来る。

陽成院の御笛」という固有名詞が、なぜここで語られるのか。即ち、柏木遺
愛の笛が源氏物語の横笛である。なぜなら、東海道における実情は、別の物語として
のものを記述、その後、別の物語としてのものを語る。その後、次の傍線部
の記述に見られるように、柏木は大殿

女三宮が柏木に心を閉ざないために自分は常転を失ってしまったのだ
女三宮と柏木との事件を起こした直後の柏木には、光源氏に対する意
識は見られない。柏木は、泣いている女三宮に「うれしや御宿世の浅
からぞりけると思はしてな。」（若菜下二六頁）と言い、また、「い
つき御心にうつし心もうしはへりぬ」（若菜下二八頁）と語る。

父の致仕大院に帰ってから、そこで初めて光源氏に対する意
識が芽生えてくるのである。さてもいみじき過ごしだる身か、世にあらむこことさまばゆく
なりぬ。恐ろしく恥ずかしく心地して、歩きなたもたまは
す。女の御たまはさらにいは、わが心地にも、いとあるまじ
きこという中にも、むかつくおはるゆえのは、思いのままにえ

触れさせてはまず、ただ、やうやうにひき入るゆえに、ひう見

そして、柏木が女三宮にあたる文を光源氏に発見されたことがか

ると、柏木は次第に従事していていくのである。

空に目をさまして、女三宮にたあるのと。

心地して、言む方なくおはる。

【若葉下】二一九頁　三〇頁

【若葉下】二三三頁

このように、柏木が精神的に弱っている様子が細かく描かれている。

そして、その弱っている柏木にさらに追い打ちを掛けているのが、女

三宮の出家である。女三宮の出家を聞いた直後の柏木の様子は、次の

ようである。

柏木は光源氏に対して、罪の意識があり、そして、光源氏を恐れている。

その為、光源氏に直接弁明するということでもす。夕霧を介して光源

ならでたまふ御信【柏木】二三三頁と記されているように、光源

氏と柏木との媒介に、夕霧が利用されているのである。

これまで、光源氏と同世代の人物と間で展開される物語であった。

作者は、世代の異なる光源氏と柏木を、女三宮という接点として物語の

展開に介在させているのである。
三
柏木の執着と亡霊

柏木は、病床の上、小侍従（密通を手引きした女房）に次のように
胸の内を明かす。

「今日さらに、この御事や、かたがてい聞かえり。この世は、かう、
はかなくて過ぎぬるを、長い世の経にこそ思わぬといふと
さるや、心をしき御事を、たびたびに悩むにいかに聞きにおい
まつら。見し夢を、心ひとつに思いあはせ。また語りもな
きが、いみじうふせくあるかな。と、とり集め思ひしみた
まえるさまの深きを、かつはいよくて恐ろしき思へり、あはれ、
はた。えもはや、この人もいみうごく。」

（橋姫）巻三九五頁

その後に、橋姫、巻三九六頁

「柏木が、生前に薔に会いたいと思っていたことが記されている。物語を通し
て、柏木の我が子薔への執着が、一貫して描かれていく。」

死期を予感しながらも、女三宮への思いとこれから誕生する我が子の
思いが話されている。その思いは、小侍従が、一貫して恐ろしき
思ひをいうほどの強さであったことがある。

「戸竹に吹き来る風のことならば末の世打ち音に伝わる
人びとは、この世にあて、この笛をたすけて来る。と思ふに、
しびしろに時りたまへる夢に、かの御府閉、ただありきさまの住
ごと。かたはらにあて、この笛をたすけて来る。」

（横笛）巻三九五頁

柏木の笛音に導かれて、柏木の亡霊が出現したことが分かる。そして、た
だありきさまの住ごとに、おびれて泣きたまふ御声にきたへむ。

橫笛巻三九五頁

さらに、音楽においても、明石源氏が、明石御室への琴の伝授に
信用をもっている。柏木の亡霊が、我が子薔の笛を伝えたい
音に伝えなむ」という言葉からも分かるように、柏木の我が子薔への執

「くはや」とて出来たあらゆる東の対面方、おもしろ急速の音
箏に吹き忘れを持っている。中将の、例にあたる離れぬどこ遊ぶに相
ある。頭中将こそあら、いとぞど吹きなる音か」と
て、立ちまわり。

この引用に記されている頭中将とは、
柏木のことである。「いとぞど吹
きなる音か」とあるように、
光源氏が柏木の箏の音に感心して
いる場面である。巻の執筆順序というのは分からないが、
もし、配列の順序通り、「箏吹」が先だとするか、
作者は柏木が気軽に楽器を箏に
する構想が既にあり、伏線としてこの場面を記したと考えられ
るだろう。

さて、先に楽器の伝授は、
親から子へと血筋に関係する」と述べたが、
そこで、光源氏の言葉の中に、「かれは陽成院の御箏なり。それ、
故式部卿宮とは、物語の上でどのように関係存在のだろうか。
テキスト類を見てもその関係については触れていな
い。ただ、「陽成院は史上
の陽成天皇」と、「故式部卿宮」にいては、
朝顧床院の父である河
海抄」の説と紫上との父とする「花鳥余言」の両説があり、未だ
特定されていない。

「故式部卿宮」については、
『日本古典文学大系』、『日本古典文学全
集』、新潮日本古典集成、『新編日本古典文
学実集』、これらのテキストでは、
陽成天皇の弟の黄保親王「式部卿宮
で箏の名手」という実在的人物を思わせるという説明がされている。
一方、玉上瑞弥は、「紫上の上の父であるが、紫上の父とし
てあるので、女性である紫上が持ち理由としては納得できないもの
であるので、

一方、玉上瑞弥は、「紫上の上の父であるが、紫上の父とし
てあるので、女性である紫上が持ち理由としては納得できないもの
五箇の伝授の後

夕霧は、光源氏との夢を二つするために六条院を訪れるが、その際、概ね決して特定の名前を出すことがないよう、はっきりしないが、特に光源氏の居所を特定するためには、両者との関係を想定する必要がある。

また、光源氏は、遺言の中で今、西から、彼の夢を語る。elpの家に残されているが、現実には別に伝授のことを信じているわけではない。こことは、光源氏の影響を受けていないことを示している。
声も心知らずも人ではいかがあらむ。なは、いとよく似通ひたりかれたまひぬ。

【横笛】三三四頁「三三五頁

『誰に世にか種はまきしと人間はいかが若年松がこたへも
あはねり。次に庚申の月を立てたまふに、御辞をもなして、ひれ臥したへり。』

【横笛】三四九頁

月日にせば、この故の人しかむ、ゆゆきためて生ひさたまたる。

【横笛】三三九頁「三三四頁

 تس

月見の宵。いつといのもあればならぬ云はあきなき中に、今宵の新たな月の色は、げばなわが世の外までにさげて思ひ流され。故 enquiqui's, 何ををりにも、たさきにけていと

どうもるなり。花鳥の色にも音といわけきまへ。言ふすればある方

のいとうさりかによりものをなのたまへ出て、みつからも
丸、この記述は、光源氏が、御誰の中にある女官に会えるよう、街を旅する旅に出たが、柏木の死を悼むようになる。光源氏の心は、柏木の死を悼むようになる。この死を悼むのは、事件の終わった後に思われるのだろう。

顧問として、柏木と茶々の密通事件は、女三宮の出家、柏木の死を討つという言わざるを得ない行動が行われた。この顧問の行動が観察されるようになったのは、女三宮の脅威が明らかになったからである。

かつての顧問が「家」の問題で、断絶したはずの子孫が存在する」ということと示しているのだとしても、薫が不義の子であるという事実が世間には明かされないくらい。物語としての進展は何もないということが明らかになった。これには、薫の伝授である高橋和夫が述べるように、柏木の場合は、父母の繁栄の契機としての子というようにも、断絶したのはの一子が存在するのだろう。この積極的な私たちは何を問題とすべきだろうか。それは親と子の問題である。

この前文の問題を、高橋和夫が述べるように、柏木から薫と真の親子としての言葉の伝授であることは理解できる。しかし、そのことがその後の物質展開のどのように関わっているのだろうか。その上、この薫の伝授が「家」の問題で、断絶したはずの子孫が存在する」ということ

また、小高芸子は、次のように述べている。

王権にまつわる主題を柏木の血の相伝の物語がひきつけることはない。薫が生まれたまちがいの生まれたまちがいない。結果的には光源氏への報復のようなものに見えながら、その実それは光源氏になった王権の主題を、明石一族とは別に、そして制度的な変革を受けつつも、ひきつづくものであったのだ。

浅尾広良氏は、「王権から自立して相承してゆく家の論理を読み取って当然であろう」と述べている。しかし、家の論理以前に、作者は、女三宮事件の結論を囲む、その一方で、光源氏の子としての薫については、陽成院の名前を用いるながら、薫は皇統に回帰することはありえない、ということを示唆しているのではあるまいか。
六 おわりに

『陽成院の御箏』それ故に、あくまで「ただ一人」薫の心情を伝えるものとして、薫の存在が詩境を構成する重要な役割を果たす。薫の位置付けと方向付けを示唆するものとして、薫物語の

その後の『源氏物語』においても、薫が皇統に回帰することはないのである。

薫物語の影響を受けて、『源氏物語』の心を描いたものではないと読み取ることができるのである。

註

1 本文の引用は『新編日本古典文学全集』（源氏物語）①、②、③、④

2 山田孝雄『源氏物語の音楽』（宝文館出版、昭和九年七月）

3 『河海抄』（室松岩雄校訂、国学院大学出版部、明治四七年六月）

4 源氏物語注解集成（花岡甫情）（桜社、昭和五五年四月）

5 高橋法夫『三の宮物語と横笛の伝授について』（源氏物語の

主題と構想）（桜社、昭和四一年二月、有精堂、平成七年七月、浅尾

広良『源氏物語の笛とその相承』（源氏物語の視界）、新典社、平成九年五月、柳井滋『陽成院の御箏』にまつる逸話の諸相）（源氏物語の新研究）内なる歴史性を考

える』（坂本常生、久下裕利編、新典社、平成七年九月）等参照。
注11と同じ。

13 注5、高橋論文。

14 指稿『源氏物語 続編における八宮の遺言の「夢点」遺言を乗り越えた女性たち』（清心語文会「九月、平成二年七月、において」）

15 注5、小嶋論文。

16 注5、浅尾論文。

（やまとた・さちこ／二〇〇〇六年度ノートルダム清心女子大学
大学院博士後期課程単位取得満期退学）